

『念仏三昧宝王論』 諸本の系譜について — その流伝背景と関連して —

加 藤 弘 孝

はじめに

飛錫（生没年不詳）の『念仏三昧宝王論』（通称『宝王論』）は、思想家としての円熟期であった大暦九年（七七四）以降に撰述されたものだと考えられる。<sup>(1)</sup> その思想には、安史の乱以降の長安における仏教界の情勢及び動向が反映されており、変革期の仏教思想として捉えた場合も興味深い点が多い。今後も継続して歴史及び思想両面での研究が進められるべきであるが、『宝王論』の流伝及び系譜に関しては未知の部分が多く、テキスト校訂の底本、対校本に関する問題も未解決のままである。<sup>(2)</sup> そこで現存する諸本を検討した上で、それらの系統を明確にし、テキスト校訂作業において前提となる書誌情報を提供したい。

第一 『念仏三昧宝王論』 諸本

現存する『念仏三昧宝王論』の写本、刊本には次のものが挙げられる。

『念仏三昧宝王論』 諸本の系譜について

- ① 禅林図書館蔵本（写本）
- ② 嘉興蔵版（刊本）
- ③ 慶安元年版（刊本）
- ④ 元禄十三年版（刊本）
- ⑤ 享保六年版（刊本）
- ⑥ 安永三年版（刊本）
- ⑦ 乾隆四十九年版（刊本）
- ⑧ 光緒二十年版（刊本）
- ⑨ 中華民國十九年版（刊本）

①は禅林寺（永観堂）内の禅林図書館（旧著山文庫）に所蔵される鎌倉期の写本である。初出は稲垣真哲編集の『禅林寺所蔵図書館収蔵典籍目録』第一であり、昭和十三年（一九三八）に発行されている。<sup>③</sup>次に京都府教育委員会によって昭和五十三年（一九七八）に編集された『浄土宗西山派三本山誓願寺光明寺禅林寺古文書目録』に『宝王論』の書名が記載され、また昭和六十二年（一九八七）の禅林図書館による『禅林図書館蔵書目録』にもその書名が挙がっている。<sup>⑤</sup>

『宝王論』最古のテキストであるが、近年の国立国会図書館の調査によって、写本の著しい損傷（虫損など）が指摘されており、同機関より「歴史的価値に鑑み、閲覧不可、現状保存」との指導を受けている。また装訂の修復をしても功を奏さないということも指摘されている。<sup>⑥</sup>

上記目録類によって写本（三巻一冊）の書誌を示すと、装訂は粘葉綴であり、法量は二四・二×十五・二。一紙

六行、一行十七字詰。ヲコト点が加點されている。巻上奥書に、

城州御願寺昭替<sup>⑦</sup>

と記され、巻下奥書には、

城州御願寺昭替、于時応安七年甲寅二月十五日奉拝見之<sup>⑧</sup>。

とあり、応安七年（一三七四）二月十五日、城州御願寺の昭替（生没年不詳）という僧侶が閲覧したことが記されている。稲垣真哲により鎌倉期の写本と比定されているが、書写年代、書写者ともに明確な情報を欠いている。粘葉綴、一紙六行、一行十七字詰とあるので、浄土教版、高野版など和版系統の形態で流通していたものを模写した可能性もある<sup>⑨</sup>。なお『浄土宗西山派三本山誓願寺光明寺禅林寺古文書目録』には、「二巻一冊」とあり、また巻下の奥書のみしか記載が無い。巻ごとの奥書記載を基本方針としている本目録が、これを載せないのは、写本の損傷と何らかの関係がある為だと推察される<sup>⑩</sup>。上下一冊として巻中への言及がないことも、その為であろう。また『禅林図書館蔵書目録』には、「念仏三昧宝王論、上、写<sup>⑪</sup>本<sup>⑫</sup>」とあり、先行する二つの目録の記事と一致しない書誌情報が掲載される。これらのことより、稲垣真哲の調査から禅林図書館の調査までの約四十九年間に、幾度か書誌情報の更新が生じていた可能性がある。

なお奥書に出る「御願寺」とは、天皇、上皇、皇后などの祈願を修する目的で、城州すなわち平安京周辺に建立された寺院のことを指す。禅林寺は貞観五年（八六三）、清和天皇（八五〇—八八〇）より定額寺に列せられ、元慶元年（八七七）には寺内に御願仏堂（円覚寺）が建立されている（『三代実録』<sup>⑬</sup>）。また十五世紀半ばに成立した『禅林寺縁起』には「御願」という語が見られる。これらのことから、禅林寺は御願寺と見做すことができ、当時の住僧達もまたそのように認識していたと考えられる。すると奥書の御願寺が何なる寺院に該当するかという選択

肢に禅林寺も含まれることになるが、恐らくはここに出る御願寺とは禅林寺のことであり、昭替は禅林寺の坊あるいは塔頭などに分蔵されていた本写本を閲覧したと捉えるべきであろう。<sup>13</sup> 閲覧時期は禅林寺第二十三世観教（一一三九五）の住持時期（『禅林寺正選歴代記』）に重なりと想定し得るものの昭替との関係は不明である。

②は清代に刊行された『嘉興大蔵経』（通称『嘉興蔵』）の「続蔵」に収録される刊本である。大谷大学、駒沢大学、長谷寺、清凉寺所蔵。書誌情報は四周单边有界。半葉九行、一行二十字。正知（一五八七）による識語には、

比丘正知向見、雲棲大師淨土代言。有飛錫法師寶王論、列在名存書不存中。心甚慕之。生年三十、耆宿萬融師得此古本相贈。喜出望外。旋梓流通。今板寄姑蘇慧慶寺久置高閣。故特捐貲重梓。伏願法界有情、同生阿彌陀佛極樂世界。丙戌冬日識于金陵祖堂。<sup>14</sup>

とあり、雲棲株宏（一五三五—一六一五）が『宝王論』を「名存書不存」に列し閲覧を望んでいたこと、正知が生年三十歳の時、万融（生没年不詳）より古本を贈られ、その後、旋梓流通させたこと、順治三年（一六四六年）、同じく正知が慧慶寺に安置していた版木を用いて重梓したことなどが記載されている。また本書は『浄土十疑論』、『浄土生無生論』と併せて『浄土三論』として刊行されている。それは同じく正知の手によって重梓された『浄土生無生論』（初刊は万曆四十五年（一六一七）の跋文からわかる）。

幽溪大師、中興天台教觀、以性具圓理、闡淨土法門、著爲生無生論。初開演於新昌石城寺。每一登座、天樂盈空。天衆同聞、事非虛誑。誠可謂離五濁之大津梁、登九蓮之勝方便。正知於丁巳年春、歸依大師、即蒙相授。旋梓流通。後因板寄慧慶、遂復久置高閣。今與十疑寶王重梓、合成淨土三論。伏願見聞隨喜、盡斷孤疑、速成三昧寶王、頓悟無生法忍。親覲彌陀等蒙授記。丙戌冬日古吳比丘正知識於祖堂。<sup>15</sup>

識語は祖堂山すなわち幽栖寺において記されており、刊行は当寺の周辺で為された可能性がある。ただ『嘉興

蔵』に収録されて刊行されるまでには、ある程度の時間差が生じているので注意が必要であろう。

③は慶安元年（一六四八）に日本で刊行された刊本である。「現行版」（『大正蔵』所収）の底本。四周双辺、半葉九行、一行十八字。佛教大学、東北大学、大正大学、大谷大学、法然院、瑞光寺、生源寺、筆者所蔵。

刊記には、

慶安元年八月吉祥日、長谷川市兵衛開版（無刊記の再刷本あり）<sup>⑬</sup>。

とある。

④は元禄十三年（一七〇〇）に日本で刊行された刊本である。『浄土宗全書』所収本の底本。美濃判、左右双辺、半葉十行、一行二十字。佛教大学、大正大学、龍谷大学、大谷大学、禅文化研究所蔵。刊記には、次の様にある。

元禄十三庚辰下旬、増上寺門前、美濃屋又右衛門、板行（無刊記の再刷本あり）<sup>⑭</sup>。

⑤は享保六年（一七二一）に日本で刊行された刊本である。先行する③④の刊本を校訂していると考えられる。四周单辺。九行、十三字。佛教大学、東京大学東洋文化研究所、大正大学、東洋大学、駒沢大学所蔵。刊記には、

享保六又歳仲秋（無刊記の再刷本あり）。

とある。なお本文には頭註が附されている。

⑥は安永三年（一七七四）に日本で刊行された『浄土十要』（七册函套）に収録される節略本である。『浄土十要』は、清朝初期に智旭（一五九九—一六五五）によって構想された叢書であり、弟子の成時（一六一八—一六七八）が刊行した。四周双辺、半葉十行、一行二一字。佛教大学、国立国会図書館、龍谷大学所蔵。刊記には、

安永三年甲午三月刻、中野宗左衛門、山本平左衛門、河南四郎右衛門、河南四郎兵衛、澤田吉左衛門、西村平八、著屋宗八、大黒屋莊兵衛、田原勘兵衛。

とある。本テキストを底本にしたものが『正統蔵』に収録されるが、編集操作が為されているので利用には注意が必要である。

⑦は乾隆四十九年（一七八四）の刊記を持つ「嘉興蔵版」の再刊本である。半葉十行、一行二二字。有界。中国国家図書館、湖南図書館、龍谷大学所蔵。刊記に、

乾隆四十九年歲次甲辰秋日、京都阜成門外衍法寺、比丘了慰敬募重刊板存本寺。

とあり、北京阜成門外の衍法寺で版行されたことがわかる。本書は『浄土津梁』という叢書に収録されており、蓮宗第十二代の徹悟（一七四一—一八一〇）による「浄土津梁跋」には、その命名の由来が記されている。

乙巳仲秋。衍法志公和尚、會刻浄土經論文集成。屬跋數語、餘因歷觀。三經明因舉果、大開浄土之門。三論顯理破迷、的示唯心之要。龍舒文、導初機而精詳曲盡。指歸集、采衆善於事理圓通。或問數紙、搜抉禪者孤陋之疑。法語一章、力振行人因循之弊。雲棲願文、自注戒殺放生等篇、莫非往生急務、助行要門。至若蓮華世界詩、雖文出遊戲、而理實圓常。況寫境傳神、引心入觀。攝化門中為不可少。善哉。念佛一門、得此諸說、無機不被、無路不通。統萬流而歸浄土、誠為一大津梁矣。爰為題名曰浄土津梁。（…下略<sup>18)</sup>。

衍法寺は建立時期こそ不明であるが、歴代の帝室と関係を有し、刻經事業が明代から盛んであった（『日下旧聞考』巻九六）。徹悟は諱を際醒といい、北京郊外の紅螺山において念仏を結社した僧である。

⑧は光緒二十年（一八九四）に刊行された『浄土十要』（四冊函套）に収録される節略本である。左右双辺、半葉九行、一行二二字。佛教大学、中国国家図書館、香港中文大学所蔵。『浄土十要』巻末には、

光緒二十年八月十五日揚州藏經院存版。<sup>19)</sup>

とあり、清朝末期の觀如（生没年不詳）による刊行情報が記される。揚州藏經院（江北刻經処）は觀如の上輩に当

たる妙空（一八二六—一八八〇）によって創設された仏教典籍刊行機関である。妙空は金陵刻經処創設者の楊文会（一八三七—一九一一）と親交があり、金陵刻經処からも『浄土十要』（四冊）が刊行された記録が残されていることから、両機関の間で何らかの協力があったことが窺える。現在、金陵刻經処で印行しているテキスト（四冊函套）はその翻刻版である。また印光（一八六一—一九四〇）校訂の活字本、『原本浄土十要』第一冊には古崑（一八九二）が同治十一年（一八七二）に記した「杭州重刻序」が収録されており、「光緒二十年版」に先駆けて重梓されていたことがわかる。<sup>(22)</sup> 更には乾隆二十三年（一七五八）に版行が為されていたことを指し示す資料もある。<sup>(23)</sup> 日本で刊行された「安永三年版」は恐らくこれに基づくのであろう。

⑨は中華民國十九年（一九三〇）のテキストである。中国佛学院蔵、駒沢大学、筆者蔵。

中華民國十九年歲在庚午爲、張母周太夫人七十生日敬刊此卷、孫鴻猷二十元、鄧啟曾維藩馬彙彝德蔣秉熿羅素誠曾紀雲各兩元、王傳鈞王傳鏞徐文蔚各拾元、清河堂二十八元、以上共九十元、計劃此編共付刻資八十元、餘資撥充印費記、北平刻經處附識。<sup>(24)</sup>

とある。半葉十行、一行二〇字。有界。

このうち②⑦⑧⑨は中国版行のものであり、①③④⑤⑥が日本において流伝してきたものである。①の識語は十四世紀まで遡り得るが、大半のテキストは清朝、江戸期以降のものであり、刊記などの書誌情報のみでは、各本を系統立てて考察するのに十分とはいえない。そこでまずは系統付け作業の背景となる撰述以後から十四世紀頃までの両地における流布状況、刊行状況を概観していきたい。

## 第二 流伝の考察

### (一) 中国における受容

『宝王論』成立以後の流伝を追っていく。『宝王論』本文が他書に初めて現れるのは、同時代の慧琳(七三七—八二〇)の『一切経音義』巻百においてである。計三一箇所の反切注釈が存在し、この時、既に三巻本であったことが確認できる。<sup>(25)</sup>『一切経音義』の撰述は、建中四年(七八三)に開始され元和二年(八〇七)に収筆となるが(『一切経音義』序)、慧琳は不空に師事し、飛錫とも面識があつたと考えられるので、『宝王論』祖本に近接するテキストを用いていた可能性は限りなく高い。また巻百所収の典籍群は『開元釈教録』に入蔵していないものが多く、それらは慧琳が住していた西明寺の蔵経によつたとする説もある。<sup>(26)</sup>なお方廣鋁は『宝王論』を含むこれら典籍群が唐中期に良く閲読されていたものであること、更には慧琳が一切経入蔵に値すると認識していたことなどを指摘している。<sup>(27)</sup>

次に引用されるのは呉越国の延寿(九〇四—九七五)の『万善同帰集』三巻である。<sup>(28)</sup>

故飛錫和尚高聲念佛三昧寶王論云。浴大海者。已用於百川。念佛名者。必成於三昧。(欠落)。亦猶清珠。下於濁水。濁水不得不清。念佛投於亂心。亂心不得不佛。既契之後。心佛雙亡。雙亡定也。雙照慧也。(欠落)定慧既均。亦何心而不佛。何佛而不心。心佛既然。則萬境萬緣無非三昧(欠落)也。<sup>(29)</sup>

「現行版」(『大正蔵』所収本)と比べて、<sup>(30)</sup>文字の異同や文の欠落が見られることから、刊本以前の古形を示している可能性がある。特に「現行版」にはある「一言以蔽、(其在茲焉)」という『論語』巻一「為政第二」の文言を



受けた一文が見えない点が興味深い。<sup>(31)</sup>

慶暦元年（一〇四一）の『崇文總目』巻四には、

往生淨土傳五卷、釋飛錫撰。<sup>(32)</sup>

とあり、『往生淨土伝』五巻という著作のみが記され、『宝王論』への言及がない。宋朝の蔵書機関である崇文院の蔵書目録が本書を掲載しない理由は、戦乱、会昌の廃仏、後周の世宗の法難などの諸事情で稀覯書となっていたのだと想定される。『万善同帰集』に引用される事を考慮すると、恐らくは写本の形態で呉越国の勢力圏において伝世されていたのであろう。<sup>(33)</sup>ただ高麗の義天（二〇五五—一一〇一）が編纂した『新編諸宗教蔵総録』巻三には、「念仏三昧宝王論三巻、飛錫述」という記載があるので、高麗から呉越国へと復還されたテキストであった可能性も残される。<sup>(34)</sup>

また関連する史料として、王古（生没年不詳）の『新修淨土往生伝』奥書がある。奥書は崇寧元年（一一〇二）、杭州の寺院において『新修淨土往生伝』三巻が刊行された際に記されたものであり、それに附された目録に、「念仏宝王論三巻」と「往生淨土伝五巻」が沙門飛錫撰として挙がっている。目録附載の意図は明確ではないが、延寿の『万善同帰集』三巻や智円（九七六—一〇二二）の『阿弥陀経疏』一卷（逸書）、『小阿弥陀経西資鈔』一卷（逸書）など呉越仏教界の影響下で撰述された典籍が目録に挙げられているのが興味深い。

北宋末期の科挙官僚である黄伯思（一〇七九—一一一八）の評論、跋文が多く収められた『東觀余論』巻下（南宋初期）には、「跋宝王論後」が収録されており、流通の事跡を確認できる。

夫子曰、立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也。夫然後行。漢書曰、坐則見堯於牆、食則見堯於羹、道之不可須臾離也如此。雖然、此特域中之道尔。首楞嚴經云、若諸衆生、憶佛念佛、見前當來、必定見佛。不假方便、

自得心開。予謂脩念佛三昧、亦當如參前倚衡與夫見堯之義、行住坐臥、皆應憶念、何患不見佛哉。此眞出世成道之要津也。脩是三昧者、當以安養爲期、蓋彌陀願力以接引羣生爲務、大光普照、攝取不舍、凡存念者盡得往生、其利博哉。豈特見堯於牆於羹但虛想乎。政和七年十一月三日、於符離境舟中、因觀唐釋飛錫念佛寶王論、因思吾夫子與漢史之言與佛合若符契、乃紀於此帙、冀時觀之以自策焉。凡見聞者、其亦勉諸。黃某長孺謹書。<sup>(36)</sup>

黃伯思は儒教や史の素養がある典型的な士大夫である。この跋文には、政和七年（一一一七）十一月三日、「念仏宝王論」を閲覽し、その内容と『論語』、『漢書』の文言が一致したので跋文を記したとある。この跋文には儒仏調和思想が明瞭に表れており、牽強付会とも言うべき黄伯思の『宝王論』観を窺うことができる。

『宝王論』の閲覽場所に関しては、符離（宿州）県境の船中とあるのが参考になる。九日後に記された『同書』所収の「跋施真人集後」に、

丁酉歲十一月十二日、武陽黃某長孺父於京路船中校之。<sup>(37)</sup>

「於京路船中」とあることから、首都開封と符離県を結ぶ運路上、すなわち汴河上の船中だったということがわかる。また宿州の四県のうち、汴河沿いの県は符離県と靈璧県のみであり、この両県の県境（現安徽省北部）だということも特定できる。<sup>(38)</sup> 黄伯思は校理がその責務である中堅官僚の秘書郎として、秘書省の蔵書目録の『秘書総目』（『崇文総目』と『秘書省統編到四庫闕書目』から構成）に記載される中央の蔵書を披閲できる立場にあった。『秘書総目』は大觀四年（一一一〇）以来、進められた秘書省の蔵書整備事業の総括として、政和七年（一一一七）に編纂されたものであり、国内の蔵書を購求繕写する編纂方針を持っていた。<sup>(39)</sup> 『東觀余論』収録の評論、跋文からは、黄伯思が各地で種々の書籍を校閲していたことが窺え、この指針と一致する。一々が公務か私務か特定できないが、国内の蔵書に注意を払っていたことは間違いないところだと思われる。

ここで注目すべきは汴河が淮陰において江南運河と連絡しており、延寿の活動地域であった呉越すなわち杭州にまで至るところである。恐らく『宝王論』はこの水運を通して見出されたものだったのだろう。水運の沿線都市に政治経済の重点が移行し情報交換が活性化した宋代において、『宝王論』の存在がかかる典型的な士大夫によつて認知され始めたのは象徴的な事跡だとも言えよう。

ところで本跋文は「慶安元年版」にも附されており、このことを根拠として任継愈編集の『佛教大辞典』では『宝王論』の「宋刻本」が存在したことを想定している。<sup>(41)</sup>『東観余論』は紹興十七年（一一四七）、黄伯思の子息である黄訥（生没年不詳）が右宣教郎充福建路转运司主管文字に任官中、編纂したものである。ここには「跋へ書名」後の形式で収録される跋文が多く見出せ、それらの大半が先の校閲作業の過程で記されたものだったと考えられる。そうすると跋文の存在が直ちに『宝王論』刊行とは結び付かないことになるが、同跋文の末尾に「冀時觀之、以自策焉。凡見聞者、其亦勉諸」とあつて、他の読者への手引きとも見える配慮が見られるので、本跋文が刊本に附する目的で執筆されていた可能性はある。

執筆の動機を考察する際に注意すべきなのは、跋文執筆と同年の政和七年（一一一七）四月、道教を偏重する徽宗（一〇八二—一一三五）の命により、六千卷の仏典（大蔵経）の中から儒教及び道教を誹謗しているものが抜き出されて焚書の憂き目を見ているという事跡である（『仏祖歴代通載』巻十九）。<sup>(42)</sup>国家事業で蔵書の充実が図られるのと並行して、大規模な仏書の禁書が執行されていた背景は見過ごすことができない。恐らく黄伯思の跋文は、『宝王論』版行の際に実施される検閲を意識して執筆されたものであり、『宝王論』の儒仏調和思想を保証する役割を果たしていたと考えられるのである。『宝王論』の節略文が部分的に収録される宗曉（一一五一—一二二四）の『楽邦文類』（一二〇〇年成立）<sup>(43)</sup>及び『楽邦遺稿』（一二〇四年成立）の内、後者には「念仏三昧宝王論跋」とし

て黄伯思の跋文が載録されているのが、跋文附載の刊本が流伝していた事実を裏付けている。

また刊行地を想定するならば、この父子の出身地が福建であり、『東觀余論』も建安漕司すなわち福建の官庁で官刻本として刊行されているという事実を勘案したい。折しもこの時期、福建では「宋福州版大藏經」が刊行中であつた。中村菊之進が「福州地方出身の官僚の中には中央政府で活躍し、その政治的地位をもつて福州版の刊行に寄与した者もあり、本版大藏經の刊行を支持した社会層の範囲の一端を成している」と述べるように、福建では士大夫層が関与する仏典刊行事業が大いに高まっていたのである。『宝王論』が福建を出身とする黄伯思周辺の科挙官僚によつて福州寺院の刻經本として刊行されていた可能性は高いだろう。ただ徽宗による仏教弾圧が苛烈を極めた重和元年（一一一八）から宣和二年（一一二〇）頃までの期間、『宋福州版大藏經』（「開元寺版」）の開雕は停滯しており、他の仏書の状況も大方、同じであつたと推察されるので、官庁の官刻本として士大夫を対象に出版されていた可能性もある。その場合、南宋の勢力圏、特に江南地方において成立した著作中に『宝王論』の引用文が見られるようになることから、刊行地の候補には、杭州なども含める必要があるかもしれない。

『楽邦文類』と『楽邦遺稿』を除いて、それら南宋期の『宝王論』引文が確認できるものを挙げれば次の如くである。まず法雲（一〇八七—一一五八）の『翻訳名義集』巻五（一一四三年成立）に、

寶王論曰、三教之理、名未始異、理未始同。且夫子四絶中一無我者、謙光之義為無我也。道無我者、長而不宰、為無我也。佛無我者、觀五蘊空、為無我也。上二教門都不明五蘊、孰辨其四諦。六度萬行聖賢階級、蔑然無聞。

但和光同塵、保雌守靜、既慈且儉、不敢為天下先。各一聖也。安用商摧其淺深歟。三教無我明矣。<sup>45</sup>

とあり、<sup>47</sup> 仏教の無我が儒教、道教の無我と働きが異なることを主張する箇所（『宝王論』巻五）を引用する。

また外典にも通じていた居士、王日休（一一一七—一一七三）の『竜舒増広淨土文』巻四（一一六〇年成立）では、証文

は出さないが、「出宝王論」として一念多仏（多善根）の思想を展開する。

行寔（生没年不詳）の『重編諸天伝』巻下（一一七三年成立）には、

或云諸天之本莫非大權。故經云、一切皆是大菩薩等、而迹示天身。然推其本、則何獨天神。所以常不輕禮一切衆。唐飛錫念未來佛、而百錄之中不許僧禮天者、蓋就迹之顯了故也。談天之本迹者、當須察此。右辯天本迹<sup>(48)</sup>とあつて、飛錫が未來仏を念じて天を礼さなかつたことを主張している。

戒度（生没年不詳）の『觀無量壽經義疏正觀記』巻上（一一八一年成立）に、

寶王論云。法身如月之體、報身如月之光、應身如月之影。萬水之内皆有月焉。言一、則萬水之月常差。言多、則虛空之月無二。伊字三點、摩醯三目<sup>(49)</sup>。

と『寶王論』巻中を引用し、また巻下にも、

寶王論云。一念為正。如佛所說、謗佛毀經、打僧罵尊、五逆四重、皆由一念、墮無間獄。今之念佛、亦止一念善業成時即登極樂。前一念五陰滅、後一念五陰生等。觀經十念、良有以也。蓋為抱疾尙羸力微心劣故、須十稱以助其念。若心盛不昧、一念生焉。彼文<sup>(50)</sup>

と『寶王論』巻中の引文を略述する。

元朝以降は、『廬山蓮宗寶鑑』、『浄土簡要録』、『念仏感応伝』<sup>(51)</sup>などに『樂邦文類』、『樂邦遺稿』からの引文が確認できるものの、直接の引文は十三世紀以降、姿を消すのである。<sup>(52)</sup>

また明代には他書からの孫引きが増えるため、恐らくは『樂邦文類』、『樂邦遺稿』の両書もまたこの頃、流伝を絶っていたと考えられる。『寶王論』の流伝については、「嘉興藏版」の跋文で指摘されるように、株宏の『雲棲浄土彙語』の「名存書不存」に、

草堂飛錫法師寶王論一卷。<sup>(53)</sup>

とあり、祿宏の時代にも依然、『宝王論』の流伝が途絶えていた裏付けが取れる。

なお于海波は、祿宏の寂後、『宝王論』と妙叶（生没年不詳）撰述の『宝王三昧念仏直指』（通称『念仏直指』）が共に合刻されていた「合刻本」が、古呉（蘇州）において発見されたことを指摘している。<sup>(54)</sup>この「合刻本」所収の『宝王論』は、先述の「嘉興蔵版」の底本であることから、「合刻本」に関する書誌情報は『宝王論』現存テキストの来歴を探る上で頗る貴重なものである。また「合刻本」の刊行年代は『念仏直指』の成立年代である洪武二十八年（一三九五年）以降であるのは確実であるが、はっきりと年代を特定することはできない。ただ正統六年（一四四一）に成った明廷の蔵書目録である『文淵閣書目』巻十七に「念仏直指一冊」とあって、これは『宝王三昧念仏直指』の略称と取れるので、<sup>(55)</sup>恐らく「合刻本」はこの頃に刊行され、程なくして姿を消したのだと推察される。「合刻本」に関する詳細は系統の考察と併せて後述する。

## （二）日本における受容

一方、日本では十三世紀から十四世紀にかけて、『宝王論』の受容が活性化した。引用は浄土教家のものを中心に多数に及ぶが、以下には『楽邦文類』、『楽邦遺稿』収録テキストからの引用、または他書の孫引きではないことが明白な引文を列挙する。これによって本邦における『宝王論』受容状況の一端が明らかになるはずである。まず禅林寺の静遍（一一六六—一二二四）による引用が確認できる。『秘宗文義要』巻五には、

此月即是月喻三昧。法性清涼乃能普現衆生心水之中非如世月也。文

と記され、裏書にその証文として『宝王論』の本文が載せられている。

念佛三昧寶王論云。三昧之宗者。欲令弱喪知不二門存乎語默匪唯淨名杜口。文殊興讚而已矣。何則夫帝網未張。千瓊焉覲。宏網忽舉。萬目齊開。浴大海者。已用於百川念佛名者。必成於三昧。一言以蔽。其在茲焉。亦猶清珠下於濁水。濁水不得不清佛想投於亂心。亂心不得不佛。既契之後。心佛雙亡。雙亡定也。雙照慧也。即定慧齊均。亦何心而不佛。何佛而不心。心佛既然。則萬境萬緣。無非三昧者也。而世上之人。多念過去釋迦之月面。想現在彌陀之海月。如救毒箭矣。如登快樂宮矣。吾亦以之爲至教矣。獨未聞念未來諸佛之聚日者。何耶。人皆侮未來玉毫不敢侮過現金色。殊不知起罪之源皆在於當來佛上。非已今佛上也。衆生苟非當佛焉在。若知母因子貴。米以糠全。有協法華不輕之心。則念佛三昧不速而成矣。<sup>(36)</sup>

本卷は奥書によつて建保三年（一二一五）正月十二日というその撰述年代を特定することができる。<sup>(37)</sup>「禪林図書館藏本」との関連性は現在のところ不明である。次に親鸞（一一七三—一二六二）の『顕浄土真実教行証文類』（通称『教行信証』）が挙げられる。

禪宗飛錫云。念佛三昧善之最上萬行元首。故曰三昧王焉。<sup>(38)</sup>已上

また

起信論云。若知雖說無有能說可說、雖念亦無能念可念、名為隨順。若離於念、名為得入。得入者、真如三昧也。況乎無念之位、在於妙覺、蓋以了心初生之相也。而言知初相者、所謂無念、非菩薩十地所知。而今之人、尚未階十信、即不依馬鳴大士、從說入於無說、從念入於無念。<sup>(39)</sup>略抄

と『大乘起信論』の証文を挙げるが、これは『宝王論』巻下からの引用である。<sup>(40)</sup>

了慧道光（一二四三—一三三〇）の『往生拾因私記』巻上には、  
故飛錫禪師云。法華三昧者即念佛三昧也。<sup>(41)</sup>已上



とあり、『宝王論』巻下を引く。

時宗の託何（一二八五—一三五四）の『器朴論』巻上には、

飛錫禪師寶王論云。念佛法華同名佛慧。<sup>(62)</sup>

と『宝王論』巻上の証文を出す。

果宝（一三〇六—一三六二）の『秘藏要文集』巻四（賢宝（一三三三—一三九八）の増補本）には、

念佛三昧寶生（ママ）論上云（飛錫撰）。夫求無價寶必下於滄海。采智慧寶必先於煩惱中求五逆相即解脫相。

魔界如即佛界如。若聽佛音而喜。聞魔聲而恚。不入音聲法門。不住音聲實際。不覺於諸法者。斯乃北轅適越之士也。安得與之而論道哉。<sup>(63)</sup>

と巻上の文言を引用する。

良心（一一三一—一四）の『選択決疑抄見聞』「第四見聞末」（底本は良栄へ一三四二—一四二八）の増補本）には、

巻中の文を引用し、

飛錫禪師釋天台行儀云。智者大師、爰自撫塵之歳、終于耳順、臥便合掌、坐必面西。大漸之際、令讀四十八願、

九品往生、光明滿山、天樂迭奏、生淨土、面西之義、亦不弘哉。<sup>(64)</sup>

とある。

聖聡（一三六六—一四四〇）の『往生論註記見聞』巻一には、

寶王論中云**十住毘婆沙並龍樹菩薩造釋華嚴經論易行品**云。菩薩道有難行道、如陸地步行也。易行道、如水路乘船也。阿彌陀佛本願之力、若人聞名稱念、自歸彼國、如船得水、遇便風、一舉千里、不亦易哉。則釋迦如來父王眷屬、六萬人釋種、皆生極樂土、兼佛與此界衆生緣深也。<sup>(65)</sup>



とある。この引文（巻中）は『樂邦文類』にも載録されるが、「十住毘婆沙並龍樹菩薩造釈華嚴經論易行品云」の箇所から、『宝王論』直接の引用だと判断できる。

例外的な資料としては、正安元年（一二九九）成立の『一遍上人絵伝』巻四の詞書に見出せる、一遍（一二三九—一二八九）が所持していたという空也（九〇三—九七二）の「文」が挙げられる。そこには、

彼詞云、心無所縁隨日暮止、身無住所隨夜曉去。忍辱衣厚不痛杖木瓦石。慈悲室深不聞罵詈誶謗。信口称三昧市中是道場。順声見仏息精即念珠。夜々持仏来迎、朝々喜最後近。任三業於天運、讓四儀於菩提矣。是依為聖持文載之。<sup>(66)</sup>

とあり、石井義長によれば、これには出入の息をもつて念珠とするという『宝王論』巻中の思想が反映されているという。寛治八年（一〇九四）成立の永超（一〇一四—一〇九五）撰『東域伝灯目錄』には「念仏三昧宝王論一卷」と記され、空也の活動年代にも近接していることから、空也が実見していたとしても不思議ではないが、証文を挙げていないのが惜しまれる。また天台の光宗（一二七六—一三五〇）の『溪嵐拾葉集』、証賢（一二六五—一三四五）の『西要抄』も『樂邦文類』からの可能性はあるが同箇所を引用する。

以上、十三世紀から十四世紀頃までの確実と思われる引文を列挙してみた。浄土教のみならず真言宗にも受容の形跡がある点が注目される。引用以外でも正中二年（一三三五）成立の栄海（一二七八—一三四七）の『真言伝』巻二に「飛錫和尚へ伝」を立項することや、『高山寺聖教目錄』にも「宝王論一部」の記載があることなどから、真言系が『宝王論』受容の一端を担っていたことがわかる。恐らく不空の高弟としての一面が密教家の目に留まったものと思われる。

なお日本における『宝王論』受容に関しては、唐中期仏教思想研究会の吉田淳雄が注目すべき説を提唱している。

それは親鸞の『教行信証』、良忠（一一九九—一二八七）の『選択伝弘決疑鈔』などの著作、『法然上人絵伝』<sup>(68)</sup>に見られる『宝王論』受容の状況から、入宋した俊苒（一一六六—一二二七）によって、建暦元年（一二一一）以降、『宝王論』の「宋刻本」が齎され、そのことを契機として浄土教家に流通したというものである。<sup>(70)</sup>俊苒に師事したという長西（一一八四—一二六六）の『浄土依憑經論章疏目錄』には、『宝王論』の記載があり、この説を裏付けるものであるが、系統の考察とも大いに関わってくる問題でもあるので、次節以降において、系統の問題と併せて考察したい。

### 第三 系統の考察

#### （一）刊行状況（中国）

「禅林図書館蔵本」から「中華民国十九年版」までの系統付けをおこなう。ここで先行研究を振り返っておくと、唐中期仏教思想研究会による研究が目覚ましい。特にメンバーの吉田淳雄は「禅林図書館蔵本」と「嘉興蔵版」以外のテキストに言及して、「慶安元年版」と「元禄十三年版」に若干の文字の異同が見られること、「享保六年版」が先行する二種の校合本であること、「安永三年版」と「光緒二十年版」が省略本であること、「乾隆四十九年版」と「中華民国十九年版」が基本的にはほぼ「現行版」と同じ系統のテキストであることなどを指摘している。<sup>(72)</sup>しかし同メンバーの鈴木行賢は吉田淳雄とは若干、見解の相違があるようである。鈴木行賢は「慶安元年版」と「元禄十三年版」、「享保六年版」の間に文字の異同があるものの、ほとんど内容は同じという認識においては同様であるが、「安永三年版」と「光緒二十年版」に関しては、「現行版」との差異は智旭が『浄土十要』選定の際に、摩耗し

て欠落した本文を補完した形跡なのであり、一概に節略本だとは言えないとする。<sup>(73)</sup>以下、両者の説を念頭において私見を述べていく。

まずは中国における刊行状況の考察から始める。「嘉興藏版」所収『宝王論』の底本と共に合刻されていたという『念仏直指』は明初の妙叶によって著された書であるが、長らく流伝を断っていた。智旭の崇禎年間（一六四二頃）の著書『淨信堂初集』には、『念仏直指』の流伝に關しての手がかりとなる序文（「刻宝王三昧念仏直指序」）が存在する。

（…上略…）。顧二百餘年、幾成廢典、流通機塞。蓮大師尚欲見而未能、而願力不磨。韓居士乃從萬融禪師處講得之。予既獲借讀、如飢醍醐。悲劫濁之方殷、喜津梁之有在。急謀付梓以廣厥傳。普願見聞隨喜、種樂土之圓因、讀誦思惟、證寶王之法印、轉相曉悟、共脫沈淪。庶不負此希有良緣也已。<sup>(74)</sup>

『念仏直指』撰述年代の洪武二十八年（一三九五）から二百余年、幾度も流通が途絶え、株宏も関することができなかった。だが万融禪師（生没年不詳）が発見した本書を韓居士（正知）が手に入れたので、それをもとに急ぎ刊行したという。なおこの序は、再刊の際に『念仏直指』（「嘉興藏」所収）の序に収録されており、『淨土十要』の活字本（『正統藏』第六一卷所収）にも挿入されている。正知、万融の件については、順治八年（一六五一）に弟子車淨直（一五九二）が重刻した際に、智旭が再び記した序文（「重刻宝王三昧念仏直指序」）に詳しく述べられている。

（…上略…）。世久失傳、故雲棲老人每欲見之、而不可得。神廟年間、古吳萬融禪伯、偶于亂書中、得此遺帙。與唐飛錫法師所撰寶王論、同爲一篇。皆雲棲老人所未見也。韓朝集居士、先刻寶王論板、置于雲棲。予續刻此直指板、留于佛日。客歲幻寓長干、有車密著居士、秉受歸戒、聽講唯識心要、及南岳大乘止觀。遂專心修淨土

行。今夏禁足九旬、執持名號。因念今時狂妄之徒、薄視念佛法門。以大悲心、手輯古今淨土法語一冊、名曰念佛須知。分為信解、發願、修行、證驗四門。蓋信願行三、乃生西之要筏。而證驗、則舉果以勸因也。節錄甫成、適予應祖堂請、重到長干。遂虛心乞予讐較可否。予曰。居士之志則善矣。但淨土法語、從古迄今、充楹積棟。曷擇其簡切精到者而流通之、不尤易取信乎。以予觀居士命名立科之旨、則叶師直指最為相似。何以言之。彼第一極樂依正、第二斥妄顯真、第三詞諍解、乃至第八示折攝、皆居士所謂信解門也。第九勸修、即居士所謂發願門也。第十勸戒殺、乃至第十八羅顯衆義、皆居士所謂修行門也。第十九一願四義、謂戒解行向、是重申以願攝信行也。戒亦是行、解即是信、向仍是願。一願便具四義、四義乃滿一願。明信願行、本非條別。願居於中而統前後、厥義彰矣。第二十示滅罪義、第二十一示列相行、皆居士所謂證驗門也。第二十二示迴向、普勸往生、例同經論有流通分。從始至終、雅合居士之旨若此。居士何不捨己從人、樂取於人以為善乎。於是居士踴躍歡喜、再拜稽首而謝曰。某乃知妙叶大師、先得我心之所同然、又能發我之所未發也。今得奉此遺編、誓當刊布流通。用薦先人、早生淨土。又願普與法界有情、決定信入此門、永不退轉。請更序厥緣、以為同志者告。噫。如車居士、亦可謂勇於自利利他者矣。讀是書者、慎勿負此苦心也哉。庚寅冬十有一月之吉、古吳滿益道人智旭、識於祖堂幽栖寺之大悲壇右。<sup>(75)</sup>

祖堂山の幽栖寺で記されたこの序文の要旨を示すと、『念仏直指』は久しく失われており、株宏が閲覧を望んでいたにも関わらず、それは叶わなかった。しかし神廟年間（一五七三—一六一五）、古吳の万融が偶然に乱書の中から、この遺帙を発見した。<sup>(76)</sup> しかもそれは『宝王論』と一編を為すものであった。どちらも株宏が生前、閲しなかったものである。正知が先に『宝王論』を刻して、版木を雲棲寺に安置した。<sup>(77)</sup> 智旭は続けて『念仏直指』を刻し、版木を仏日寺に留めた。その後、智旭の弟子に車浄直（一五九二—）という居士がおり、発心して古今の淨土法語

を集め『念仏須知』一冊とした。本書は信解、発願、修行、証驗の四門に分かれており、智旭が読んだところ、『念仏直指』の内容と一致したので、これを居士に薦めて、居士が世に流通させたというのである。

次に示す車浄直の跋語には、「自丁亥冬」と記され、順治四年（一六四七）からの出来事だったことがわかる。また刊行時に「時年六十」とあるので車浄直の万曆二十年（一五九二）という生年も特定できる。

浄直向讀雲棲大師法語、便知有淨土法門。然猶謂淨業與禪正如春蘭秋菊、不妨各擅其美。未知淨業即是無上深妙禪也。自丁亥冬、登祖堂禮滿益大師、聞禪淨不二之談。謂不惟不可分、亦且無待合、雖慕之、今讀此念佛直指、方信滿師實非臆說。兼信永明大師四料簡語直不我欺。故力募衆緣、刻印流通。而衆友亦各歡喜樂助。當知阿彌陀佛弘誓願力貫徹于人心久矣。刻既成。敬跋數語以識法喜。辛卯中秋望月、淨業弟子車浄直書于四蓮居。時年六十。<sup>(78)</sup>

また生年に関しては、正知も跋文を利用することによって特定できる。すなわち順治四年（一六四七）、幽棲禪寺において記された『浄土法語』の跋文には、

丁亥季春、菩薩戒比丘正知識于幽棲禪寺。時年六十有一。<sup>(79)</sup>

とあり、六十一歳であることがわかる。これによって、万曆十五年（一五八七）という正知の生年が判明し、万融が二書を発見した時期を特定することができる。本稿一節に挙げた「嘉興藏版」跋文には、「生年三十、耆宿万融師得此古本相贈。喜出望外、旋梓流通」とあるので、万曆四十四年（一六一六）という年代が導き出されるのである。

また智旭の門人の成時が康熙七年（一六六八）以降に編纂刊行した『浄土十要』<sup>(80)</sup>の巻五には、述曰。昔雲棲宏祖在日、深慕飛錫法師寶王論及妙叶禪師念佛直指二書。往往博諏、未獲遽止。神廟末年、古吳

萬融老宿某、偶於亂楮中獲一遺編。蓋二書合刻也。磨滅之餘、僅存墨影。韓朝集居士正知、與靈峰旭老人後先梓而行之。及老人流通淨要時、遂將二書雙珎竝薦。而直指前序略載此緣。且若深惜其未入宏祖之慧照也。今刻十要、奉寶王次十疑之後。其論所云念未來佛、即信願二種資糧、故最為得要云。<sup>(81)</sup>

と述べられている。先述の「重刻宝王三昧念仏直指序」を下敷にした文であるが、「磨滅之余、僅存墨影」と記して、磨滅の痕跡が僅かに墨影にあったとする。<sup>(82)</sup>「合刻本」所収の両書に共通する書誌情報を提示しているところが目新しい。需要があれば短期間でも磨耗することから、両書が過去に流通していたことを強調する成時の意図があるのかもしれない。ここでは智旭が「淨要」流通の時に、二書を挙げて薦め、「直指前序」の中に、この縁を略して載せるとある。「直指前序」とは、まさしく「重刻宝王三昧念仏直指序」のことであり、『淨土十要』にも、成時によつて若干の改変が施された同序文が収録されている。ところで「淨要」とは「淨土要典」の略称である。そのことは次の文からわかる。すなわち『同書』卷八には、

述曰。靈峰老人有懷於淨土要典隨緣會取次流通。癸巳後尚名九要。成時白老人云、西齋詩千古絕倡。請以十要行。庶可稱觀止矣。老人撫掌稱善。甲午成時從金陵入山。(…中略…)。乙未老人西逝。丁未余適金陵、見九要板燬散、爰有重刻之舉。謹奉靈峰西齋詩選本編為第八簡。刻老人所製贊於簡端、顏全書為十要。原詩三卷而下兩卷於七言氣格稍不稱。致使文人有英氣者未免錯過希粟之談。細翫之、天然五言本色也。遂以五言行。識其緣起如右。<sup>(83)</sup>

とあり、「淨土要典」を、機縁に随つて流通を取次ぎ、順治十年（一六五三）以降、「淨土九要」と名付けたとある。また同じく成時編の『靈峰宗論』に載録される「靈峰滿益大師自伝」（順治十二年（一六五五））にも、次年五十六歲甲午、於正月應豐南仁義院請、法施畢、出新安。二月後褒灑陀日、還靈峰。夏臥病、選西齋淨土

詩、製贊補入淨土九要、名淨土十要。<sup>(84)</sup>

とある。<sup>(85)</sup> 于海波は「九要」という語が一六五四年以前には見出せないことから、その構想時期を一六五四年の春あるいは夏に想定している。<sup>(86)</sup> 「余適金陵、見九要板燬散」の記述からは、「淨土九要」の版木が金陵すなわち祖堂山の幽棲寺にあったことがわかる。智旭の「淨土要典」として再刊された『念仏直指』の識語が祖堂山の幽棲寺で書かれ、しかも刊行地が近辺の長干（大報恩寺）であることから、<sup>(87)</sup> 同じく幽棲寺で書かれた正知の跋語が附されている『淨土三論』、『淨土法語』の刊行もまた智旭の編纂活動の一環だったと捉えることができる。それが「淨土九要」、「淨土十要」の叢書を編纂する構想へと繋がったものであろう。「淨土九要」の選定に関しては、『靈峰宗論』五之三「儒釈宗伝窃議」に言及がある。

遠公後、凡修淨業得往生者、皆見知聞知之流類也。有人僅立蓮宗七祖、但約行化最專者耳。然四明尊者、慈雲懺主等、何嘗不以淨土行化。而智者大師十疑論、飛錫法師寶王論、天如禪師淨土或問、楚石禪師懷淨土詩、妙協法師念佛直指、尤於淨土法門有功。至若近世、則幽溪師生無生論、袁中郎西方合論、皆遠公之的裔也。<sup>(88)</sup>

現行版『淨土十要』と重なる典籍が多く、特にその撰者達を慧遠（三三四—四一六）の後裔と見做すところが興味深い。

なお同じく『靈峰宗論』五之三には「祖堂幽棲禪寺藏經閣記」が載せられている。

予於大悲懺壇、先有記銘。今藏閣雖未告成。實予心所最急者。蓋佛祖慧命。全賴三藏始傳。緬惟宋朝藏板有十餘部。今僅存南北二藏、頗模糊。嘉興書本藏經、猶未全足。真九鼎一絲之懼。<sup>(89)</sup>

ここでは、かつて幽棲寺の藏經閣には、「宋朝藏板」が十余部あったが、今では「南北二藏」のみであること、「嘉興書本藏經」（「嘉興藏」か）も未だに蔵していないことなどが述べられている。「淨土九要」の版木も恐らく



本所に収められていたのであろう。

『浄土十要』序文には、

昔靈峰老人、以正法眼、選定浄土十要一書。剗刪<sup>90</sup>未全。乙未以後、梨棗四散。迄丁未年、焚失數種。成時竊念像季久轉。唯此一門、契理契機。而浄土諸書、唯此諸要、盡美盡善。爰加點評、稍事節略。

とあり、「浄土十要」版木の剗刪が整つていなかったということが記されている。構想期間の短さも併せて考慮すると、旧版を流用したものであったはずである。「浄土要典」として刊行された『念仏直指』を見る限り節略はなく、成時版ともいふべき『浄土十要』に収録される際に、大幅な改変が為されたと見做すべきである。<sup>91</sup>また『浄土十要』『安永三年版』のみに存在する「旧版」との校異は「嘉興蔵版」と一致するので、このことから「嘉興蔵版」を参照して節略したことがわかる。本文の異同からも成時が「嘉興蔵版」を参照していることは間違いない。すなわち智旭構想の『浄土十要』とは現在「嘉興蔵版」に収録されるテキストを中心としたものだったのである。

以上、大陸における『宝王論』諸本の系統を扱った。まず正知が「合刻本」(十五世紀頃成立)を底本に「初刊本」を、『浄土生無生論』と同じく万曆四十五年(一六一七)頃に刊行し、その後、順治三年(一六四六)に再び正知によって『宝王論』『嘉興蔵版』が重梓された。この「嘉興蔵版」重梓は、智旭の推進する「浄土要典」刊行事業の一環であり、後に「浄土九要」、「浄土十要」といった浄土經典の叢書に組み込まれることとなった。この刊行事業は智旭の死によって、一時、頓挫したが、弟子の成時が受け継ぎ、大幅な節略を施して成時版ともいふべき『浄土十要』を流通させるに至ったのである。

## (二) 刊行状況(日本)



次に日本における出版状況に目を転じてみる。「享保六年版」の凡例では、現在、流通している旧本には文字筆画などの誤りが多いとして二本を校合している。

寶王論行于世也。二本舊本、頗文字筆畫刀刁之誤不少。故依劄劄氏之需、更改正舊本、以今成三卷也。<sup>92</sup>

享保年間（一七一六—一七三六）に流通していた二本とは「慶安元年版」と「元禄十三年版」であり、二本を比較してみると、少なからざる文字の異同が見出せる。この異同をもって文字筆画などの誤りと見做したのであろう。ところで文字の異同に注目した場合、ある事実が気付かされる。それは「慶安元年版」と「元禄十三年版」間の異同が、大陸で刊行された「嘉興蔵版」と「慶安元年版」との差異（七七箇所の相違）に、かなりの割合で重複するということである。このことは「元禄十三年版」の底本が「嘉興蔵版」であることを示している。字体や書体（明朝体）などに、共通する点が見出せることから、大方、間違いないところであると考えられる。『寶王論』が所収される『嘉興蔵』の「統蔵」は、康熙五年（一六六六）に完成しており、速やかに日本に輸入されている。<sup>93</sup>「元禄十三年版」版行は江戸の書肆によつて為されていることから、関東の寺院に所蔵されていたものを底本としていたと考えられる。この考察を念頭におき、更に異同の観点から諸本に注目した場合、「中華民國十九年版」も「嘉興蔵版」を受けていることがわかる。「乾隆四十九年版」は「嘉興蔵版」の重刊であるし、「安永三年版」と「光緒二十年版」の『浄土十要』所収本は先述の通りである。つまり若干の差異とは言えない異同数から推察すると、両系統を校合した「享保六年版」を除いて、「合刻本」を底本とする「嘉興蔵版」の影響下にある「元禄十三年版」、「安永三年版」、「乾隆四十九年版」、「光緒二十年版」、「中華民國十九年版」と「慶安元年版」とに大別できるといふことになる。つまり「慶安元年版」のみが異質性を持ち、系統が異なることになるのである。

吉田淳雄は、文字の異同には言及せず、「乾隆四十九年版」の底本（「嘉興蔵版」）と「慶安元年版」の関係につ

いて、黄伯思の手による跋文、日本における流伝状況を根拠に、「慶安版の底本について想像を逞しくすれば、恐らくは鎌倉時代の俊仍将来本かその系統にある伝本が、何処かの寺院の経蔵から借り出されたものと思われる<sup>(94)</sup>」と両者に関連が無いことを述べて、系統の問題解決への糸口を与えている。確かに跋文に注目した場合、『楽邦遺稿』に、節略文ではあるものの同様の跋文が載っているということは、「俊仍将来本」にも同様の跋文があった蓋然性は高くなる。「嘉興藏版」にこの跋文が無いのは、「合刻本」として刊行された際に、削除されたのを反映しているとも考えられる。「慶安元年版」の刊行者が『東観余論』収録の跋文を参照して挿入した可能性も残されるが、『東観余論』収録の跋文とは文字の異同がある一方、『楽邦遺稿』収録の跋文とは、省略された箇所を除いて一致することなどからも、もともと底本にあったと見做しても良いだろう。

吉田淳雄の指摘のように、「慶安元年版」が「俊仍将来本」の系統に属する可能性は十分にあり得る。ただ俊仍と断定し得る材料も無いので、<sup>(95)</sup>ここでは将来者に、俊仍以降の入宋僧や日宋商人などをも含める意味で「将来本」と称する。また両系統の差異がほぼ文字の異同のみに止まっていることも、両者の底本が江南地方で流伝していた刊本を淵源にしていることを踏まえるならば得心が行く。「将来本」は十三、四世紀頃、「合刻本」は十五世紀頃の流伝であり、時期も比較的に近接しているのである。なお吉田淳雄の想定する「何処かの寺院の経蔵」に収められていた「慶安元年版」の底本について言及すると、京都禅林寺の「禅林図書館蔵本」が、鎌倉期という時期や京師という地理的環境など、これに相応しい条件を備えているようにも思われるが、それは精査してみなければ解らない。写本修復技術の更なる発達を願うばかりである。また「慶安元年版」には中古音での音通もしない、本文中の明らかな誤字（「惑」↓「感」、「犬」↓「太」、「忽」↓「忽」、「日」↓「白」、「仗」↓「伏」、「令」↓「今」、「述」↓「迷」）があり、写本を底本としていた可能性自体はあり得る。付け加えるならば「慶安元年版」底本の脱字か

どうかは判断できないが、「慶安元年版」は「嘉興蔵版」と比べて総字数が一〇字少ないということも指摘しておく。

#### おわりに

以上、『宝王論』の系統について考察した結果、蘇州に流伝していた「合刻本」（十五世紀頃）を底本とする「嘉興蔵版」が「慶安元年版」以外の全ての刊本に影響していることを明らかにした。また孤立する「慶安元年版」に關しては、南宋の勢力圏で流通していた「宋刻本」にまで遡り得る「将来本」の系統に属する可能性があるという仮説の信憑性を補強することができた。これらの考察によって宋代における印刷技術の発達、運河を中心とする基幹的環境の整備、民間における日宋間の活発な交流などを背景にした短期間での『宝王論』の広範な流布状況が浮かび上がってくる。恐らくは「禪林図書館蔵本」を精査することによって最終的な確証が得られ、それに伴って「宋刻本」に近接する「将来本」の全容も自ずと明らかとなるであろう。したがってそれまでの校合作業においては、誤字脱字も無く大陸における来歴が明確な上に最古年代の跋文を持つ「合刻本」系統の「嘉興蔵版」を底本として用い、「慶安元年版」は、あくまで「将来本」系統の可能性を有するテキストと位置付けた上で対校本として用いるのが、現段階での学術上の安全かつ慎重なテキストの運用姿勢だといえる。

諸本の系統が定まったところで、一つの仮説の提唱をおこないたい。安部隆一の研究によれば、変改の時代を背景とする宋代の校書の風には概して主観的傾向があり、旧本に対してかなりの校改が加えられているという<sup>(98)</sup>。十三、四世紀頃の引用文などを精査すると「嘉興蔵版」、「慶安元年版」は「宋刻本」の形態を基本的に保持していること

がわかる。従つて『宝王論』の現存テキストもまたその例に洩れず、何らかの改変が施されている恐れがある。筆者はその改変について、中国学の範疇内での本文考証が為されたことを想定している。すなわち「宋刻本」の刊行時期は宋学、道学の形成時期<sup>(99)</sup>と重なっており、宋学に類する外典の文がこの時期に挿入された可能性があり得るのである。前述の延寿の『万善同帰集』引用文（写本時代）に見られない「一言以蔽、（其在茲焉）」の一文は『論語』を典拠としている。この一文が「現行版」にあることで、念仏と孔子の教えの一致が強調づけられている。飛錫の撰述の碑文などでは、基本的に外典は修辭的な用いられ方をしていることから、おそらくこの観点から潤色されたと見て良いであろう。前掲の宋代の士大夫の典型ともいべき黄伯思がこの観点で『宝王論』を受容していることもこれを裏付けている。

ところで延寿と黄伯思の中間期に活動した北宋の賛寧（九一九—一〇〇二）は、『宋高僧伝』卷三「唐大聖千福寺飛錫伝」において、この観点から飛錫の評価を下している。

系曰。錫外研儒墨、其筆仍長。時多請其論議。如忠國師楚金等碑。與晉陵德宣吳興晝公同獵廣原、不知鹿死何人之手。然宣錫二公、亦有不羈之失。緣飾過其實。如晝公合建中之體。擬事得其倫。唯虛與實不可同日也<sup>(100)</sup>。

すなわちここでは、外典に通じた名文家として高名な飛錫、德宣（生没年不詳）、皎然（七三〇—七九九）<sup>(101)</sup>という同時代の三僧を比較し、飛錫、德宣の文に対しては、縁飾がその実を過ぎると批判する一方、皎然の文には高い評価を与えているのである。皎然が『儒釈交遊伝』という儒釈の交遊を主題とする書物を著していることから、<sup>(102)</sup>評価の基準には儒教と仏教の調和という主題が大きく作用していることが窺える。中央の僧官であった賛寧の見解が、北宋を通して主流であり続けたとするならば、飛錫の著作は長らく存在感を薄めていた可能性が生じてくる。そののみならず、儒教、道教に否定的な仏書には、焚書の危険すらもあつたことは先述した通りである。これら諸

事情を勘案するならば、南宋における『宝王論』流通は、黄伯思周辺において宋学の視点からの本文潤色が為された結果だと考えられるのである。<sup>(16)</sup>この仮説の最終的な確証を得るためには、今後、更に写本時代の引文などを用いての、広範囲かつ精密な考察をおこなう必要がある。

なお江戸期以降の注釈書及び引文については、本論の主題に直接関わらないため省略した。これらについて一言すると、『大谷派学寮講義年鑑』には、『宝王論』の講義記録が複数確認でき、<sup>(16)</sup>現時点で、暁烏文庫所蔵の『念仏三昧宝王論卷』（写本）が、明治四十年（一九〇七）の安居における牧野神爽（一八四五—一九〇八）による講義録であることが判明している。著者不明の他の註釈書についても、恐らくは大半が安居の講義録に関連する可能性が高いと思われる。

#### 註

- (1) 拙稿「『念仏三昧宝王論』の撰述年代について」七九～八二頁（『印度学仏教学研究』第五九卷、第二号（一二三）、日本印度学仏教学会、二〇一一年）。佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』二二七～二二八頁（佛教大学総合研究所、二〇一一年）。
- (2) 唐中期仏教思想研究会編『念仏三昧宝王論の研究』十七～二十頁（『大正大学総合佛教研究所研究叢書』第二二巻、ノンブル社、二〇〇九年）。「資料篇」において、国内で刊行された諸版本、活字本をもとに校合作業がなされているものの、選定の基準は明確ではない。
- (3) 稲垣真哲編『禅林寺所蔵図書館収蔵典籍目録』第一、七頁（初出は『禅林』第二五巻、第十号～第二七巻、第三号、一九三七～一九三九年）。

- (4) 京都府教育委員会編『浄土宗西山派三本山誓願寺光明寺禅林寺古文書目録』九九頁（「京都府古文書等緊急調査報告書」京都府教育委員会、一九七八年）。
- (5) 禅林図書館運営委員会編『禅林図書館蔵書目録』五一頁（禅林図書館、一九八七年）。
- (6) 二〇一〇年十二月、禅林図書館の岸野亮哲主任より御提供頂いた書誌情報である。
- (7) 稲垣真哲編『前掲目録』第一（七頁）。誤植を訂正したという京都府教育委員会編『前掲目録』掲載の奥書を参照した。両者の差異は、くずし字の誤読によるものである。
- (8) 京都府教育委員会編『前掲目録』九九頁。
- (9) 藤堂祐範は和版系統について、一行十七字詰のものが多く、粘葉綴の場合は半面六行のことが多いとしている。  
『増訂新版 浄土教版の研究』七頁、二一―二三頁（山喜房佛書林、一九七六年、初出は一九三〇年）。
- (10) なお同目録には、「現在の別置分（貴重書類）は右目録（稲垣真哲編『前掲目録』）より点数が少なく、かつ若干出入りがある」（一〇九頁）とも述べられている。
- (11) 禅林図書館運営委員会編『前掲目録』五一頁。
- (12) 西口順子「禅林寺の歴史」一三七―一三九頁（「京都・永観堂禅林寺の名宝」展図録作成委員会編『京都・永観堂禅林寺の名宝』一九九六年）。
- (13) 阿部隆一は、図書伝存の事情に関して「大寺院の蔵書は、実際はそれを構成する坊や塔頭に分蔵されていたから、全滅の災は免れ得た」と述べている。「漢籍」三八頁（『文化財講座 日本の美術十五 典籍Ⅱ』第一法規出版、一九八三年）。また同寺には元和四年（二六一八）の『法庫書籍目録』が所蔵されるが未見である。
- (14) 『念仏三昧宝王論』卷下（「嘉興蔵版」十四丁裏）。

- (15) 『浄土生無生論』(「嘉興藏版」十三丁裏)。
- (16) 『念仏三昧宝王論』(「慶安元年版」四十九裏)。
- (17) 『念仏三昧宝王論』(「元禄十三年版」十三丁表)。
- (18) 『徹悟禪師語録』卷下(「同治十年版」七裏〜八裏)。
- (19) 『浄土十要』卷十(「光緒二十年版」第四冊、百十四丁表)。
- (20) 陳繼東『清末仏教の研究―楊文会を中心として―』八九〜九四頁(山喜房佛書林、二〇〇三年)。また観如は妙空の後継者だという(一九六頁)。
- (21) 『金陵刻經処流通經典目錄』三十二丁裏。
- (22) 印光校訂『原本浄土十要』第一冊、九〜十頁(上海佛学書局、一九三二年)。古崑が編集した『浄土隨学』にも「浄土十要重梓序」として収録されている。なお現在、中国文化圏で発行されている『浄土十要』の活字本(「福建蒲田広化寺本」など)は、「印光校訂本」を底本とするものが大半である。
- (23) 施延鏞編『中国叢書題識』下冊、八二八頁(北京図書館出版社、二〇〇三年)。施延鏞の死後に出版。
- (24) 『念仏三昧宝王論』卷下(「中華民國十九年版」十三裏)。
- (25) 『一切経音義』卷百(「高麗大藏經」第四三卷、一〇〇〇上〜一〇〇二下)。
- (26) 高田時雄「藏経音義の敦煌吐魯番本と高麗藏」二〜三頁(『敦煌写本研究年報』第四号、京都大学人文科学研究所「西陲発現中国中世写本研究班」、二〇一〇年)。
- (27) 方廣錫『中国写本大藏経研究』二九二〜二九三頁(上海古籍出版社、二〇〇六年)。
- (28) 森本真順「万善同帰集六卷 解題」二五五頁(『浄土宗全書』第二一卷、浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局、一九

『念仏三昧宝王論』諸本の系譜について

七二年)。

(29) 『万善同帰集』 卷上 (『大正藏』 第四八卷、九六二上〜中)。

(30) 浴大海者。已用於百川。念佛名者。必成於三昧。(一言以蔽、其在茲焉)。亦猶清珠。下於濁水。濁水不得不清。佛想投於亂心。亂心不得不佛。既契之後。心佛雙亡。雙亡定也。雙照慧也。即定慧齊均。亦何心而不佛。何佛而不心。心佛既然。則萬境萬緣無非三昧者也 (『大正藏』 第四七卷、一三四上〜中)。

(31) 原文には「詩三百一言以蔽之」とある (『享保六年版』 頭註の指摘)。

(32) 現行版『崇文総目』は紹興十三年 (一一四三) に闕書目録として改定されたものである。なお南宋初頭の鄭樵 (一一〇四―一一六二) の『通志略』「芸文略」第五や『宋史』卷二〇五「芸文志」第四にも『往生浄土伝』の書名が挙がっているが、何れも現存目録ではない点に留意すべきである。

(33) 塚本善隆は円珍 (八一四―八九一) の『福州温州台州求得経律論疏記外書等目録』に『誓往生浄土文』一卷なる飛錫の著作を挙げる。会昌の廃仏を免れた飛錫の著作が江南地方で伝世されていた事例である。『唐中期の浄土教―特に法照禪師の研究―』三〇三〜三〇四頁 (『東方文化学院京都研究所研究報告』第四冊、東方文化学院京都研究所、一九三三年)。

(34) 竺沙雅章は唐末五代の相次ぐ戦乱、会昌の廃仏によって多くの仏書が散失したこと、高麗から呉越国へと天台典籍の復還が為されたことなどを指摘している。また高麗との交流には延寿も関与している。『宋元仏教文化史研究』五八〜六二頁 (汲古書院、二〇〇〇年)。

(35) 小野玄妙編『仏書解説大辞典』第六卷、二三八〜二三九頁 (大東出版社、一九三三〜一九五五年)。高瀬承厳執筆の「新修往生伝」項目参照。高瀬承厳は欠落した中巻に、飛錫の伝が立てられていたことを推測している。



- (36) 『東観余論』巻下（「上海図書館蔵本」影印、六十丁裏～六十一丁裏）。
- (37) 『東観余論』巻下（「上海図書館蔵本」影印、六十二丁表）。
- (38) 『中国歴史地図集』参照。汴河に関しては青山定雄の『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』（吉川弘文館、一九六三年）に詳しい。二二三～二五六頁。なお唐中期仏教思想研究会は、「於符離境舟中」を「符離県の船中において」と翻訳する。『念仏三昧宝王論の研究』三二三頁（「大正大学総合佛教研究所研究叢書」第二二巻、ノンブル社、二〇〇九年）。
- (39) 會谷佳光『宋代書籍聚散考―新唐書芸文志釈氏類の研究―』九～三三頁（汲古書院、二〇〇四年）。安部隆一「前掲論文」二六頁。また政和二年（一一二二）には秘書小監である趙存誠（生没年不詳）の意見を採用して全国的に求書活動を展開している（『宋会要輯稿』五五）。森克己「宋代槧本の禁輸と日本への流伝」六九七頁（岩井博士古稀記念事業会編『典籍論集 岩井博士古稀記念』岩井博士古稀記念事業会、一九六三年）。
- (40) 宮崎市定『東洋的近世』四四頁（教育タイムス社、一九五〇年）。また小島毅は、宋代の士大夫間における精神文化の形成には、水運を用いての船の旅が大きな役割を果たしていたことを、陸游（一一二五―一二〇九）の『入蜀記』を典拠に主張している。『中国思想と宗教の奔流 宋朝』二五一頁（『中国の歴史』七、講談社、二〇〇五年）。
- (41) 任繼愈編『佛教大辞典』八〇八頁（江蘇古籍出版社、二〇〇二年）。
- (42) 久保田量遠『支那儒道仏交渉史』一九八頁（『大東名著選』第四六巻、大東出版社、一九四三年）。入蔵が確認されながら、現存しないものは、この時、焼却されたとも考えられる。
- (43) 林五邦「楽邦文類解題」十頁（『国訳一切経』諸宗部七、大東出版社、一九三六年）。
- (44) 中村菊之進「宋福州版大蔵経考（一）」二四頁（『密教文化』第一五二巻、密教研究会、一九八五年）。

- (45) 久保田量遠『中国儒道仏三教史論』四五三～四五九頁（東方書院、一九三一年）。
- (46) 『翻訳名義集』巻五（『大正蔵』第五四巻、一一四六上～一一四六中）。
- (47) 唐中期仏教思想研究会編『前掲書』十七頁。
- (48) 『重編諸天伝』巻下（『正統蔵』第一五〇冊、二八四上）。「寛文元年版」があるが未見。
- (49) 『観無量寿経義疏正観記』巻上（『寛永六年版』四十二丁表）。
- (50) 『観無量寿経義疏正観記』巻下（『寛永六年版』四十一丁裏～四十二丁表）。
- (51) 小笠原宣秀「禅林寺所蔵『念仏感応伝』に就いて」七頁（『龍谷学報』第三三二号、龍谷学会、一九三八年）。
- (52) もし『宝王論』が官刻本の形態をとって流通していたとするならば、士大夫を主体とする刊行事業が著しく減退する元代に、姿を消すというのは合点が行く話のように思われる。元代の出版事情に関しては下記を参照。井上進『中国出版文化史―書物世界と知の風景―』一七六～一七八頁（名古屋大学出版会、二〇〇二年）。
- (53) 『雲棲浄土彙語』（『正統蔵』第六二巻、十一下）。
- (54) 于海波『清代浄土宗著述研究』一七四～一七五頁（『儒道釈博士論文叢書』、四川出版集団巴蜀書社、二〇〇九年）。
- (55) 『宝王論』、『宝王三昧念仏直指』共に雲棲株宏が閲覧を欲していた散逸書籍だという。
- (55) 『某竹堂書目』巻六にも同様の記載があるが、『文淵閣書目』から抄録された可能性がある。椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』四九九頁（『學術叢書・禅仏教』大東出版社、一九九三年）。
- (56) 『秘宗文義要』巻五（『真言宗全書』第二巻、一三三上～下）。
- (57) 小田慈舟「解題」一四二頁（『真言宗全書』附巻、真言宗全書刊行会、一九三七年）。また底本は建長四年（一二五二）に書写されたものである。

- (58) 『顯淨土真実教行証文類』 行卷（『大正藏』第八三卷、五九七上）。
- (59) 『顯淨土真実教行証文類』 真仏土卷（『大正藏』第八三卷、六二六中）。
- (60) 真宗聖典編纂委員会編『浄土真宗聖典―註釈版―』三七二頁（本願寺出版部、一九八八年）。
- (61) 『往生拾因私記』（承応二年版）二三丁表裏。
- (62) 『器朴論』 卷上（『大正藏』第八四卷、九中）。寛永十一年（一六三四）の写本（龍谷大学所蔵）が存在するが未見。
- (63) 『秘蔵要文集』 卷四（『真言宗全書』第二二卷、三二六上）。底本は文安二年（一四四五）の写本。
- (64) 『選択決疑抄見聞』「第四見聞末」（『浄全』七、八六五上）。底本は江戸期写本。ウェブサイト上の「宗祖法然上人八〇〇年大遠忌記念『浄土宗全書』検索システム」を利用。
- (65) 『往生論註記見聞』 卷一（『寛永十二年版』）。ほぼ同内容と言える「慶安四年版」がある。丸山博正『往生論註記見聞』四九頁（大谷旭雄編『聖聡上人典籍研究』大本山増上寺、一九八九年）。
- (66) 望月信成編『一遍聖絵』六八頁（『新修 日本絵巻物全集』第十一卷、角川書店、一九七五年）。
- (67) 石井義長『空也―我が国の念仏の祖師と申すべし―』四二頁（『ミネルヴァ日本評伝選』ミネルヴァ書房、二〇〇九年）。同書によれば、「文」は『発心求道集』と連関する可能性があるという（二二五―二三三頁）。
- (68) 良忠の引用は他に『観経疏略鈔』、『観経疏伝通記』、『西宗要聴書』などにも見出せる（何れも同箇所引用）。『楽邦文類』から引用した可能性もある。なお『選択伝弘決疑鈔』巻五には「念仏宝王論」という略称が見られるが、この略称の用例は珍しく、『新修浄土往生伝』奥書や『東観余論』及び『慶安元年版』に附載される『宝王論』跋文などに見出せるに過ぎない。

(69) 『九卷伝』 卷九上にも同様の引用がある。なお『九卷伝』は『四十八卷伝』の祖本的な性格を持つテキストだとも

言われている。若杉準治「法然上人絵伝について―『九巻伝』の復原を中心に―」三一―三三頁（信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英』第六巻、同朋社出版、一九八八年）。本書も『楽邦文類』から引用した可能性がある。

- (70) 吉田淳雄「『念仏三昧宝王論』 流传考―附現存諸本・註釈書紹介」三八四頁（唐中期仏教思想研究会編『念仏三昧宝王論の研究』ノンブル社、二〇〇九年）。

- (71) 望月信亨編『望月仏教大辞典』、四一六二頁（仏教大辞典発行所、一九三二年）。

- (72) 吉田淳雄「前掲論文」三七〇―三七四頁。

- (73) 鈴木行賢「『浄土十要』所収『宝王論』について」一―二十頁（『仏教文化学会紀要』第十八号、仏教文化学会、二〇〇九年）。

- (74) 『浄信堂初集』巻五（『明崇禎刻本』二十八丁裏―二十九丁表）。

- (75) 『宝王三昧念仏直指』巻上（『嘉興蔵版』一丁表―三丁表）。なお延宝八年（一六八〇）、「嘉興蔵版」を翻刻したものが日本で刊行されている。

- (76) 万融の事跡は『靈峰満益大師宗論』（通称『靈峰宗論』）巻六之四や聶先（生没年不詳）の『続指月録』巻十七などに見える。

- (77) 先述の正知による「識語」では、版本が重梓前まで慧慶寺に安置してあったことを述べている。それ以前には雲棲寺に安置されていたのであろうか。

- (78) 『宝王三昧念仏直指』巻下（『嘉興蔵版』六丁表―裏）。

- (79) 『浄土法語』（『嘉興蔵版』九丁裏）。「延宝九年版」（筆者所蔵）が延宝九年（一六八一）に日本で刊行されている。

「嘉興藏版」を底本としているが、跋文が省かれている。

- (80) 于海波『前掲書』一三七頁。また成時の生年に関しては『浄土十要』卷八の題跋により万曆四十六年（一六一八）という年代が特定でき、没年に關しても『往生録』卷四の記述によつて康熙十七年（一六七八）という年代がわかる。

- (81) 『浄土十要』卷五（「安永三年版」一丁表）。

- (82) 先学は「磨滅之余、僅存墨影」を、「磨滅して、僅かに墨の跡が存するほどのみであつた」と解釈するが、恐らく「余」を国訓で読解したことによる誤解であろう。

- (83) 『浄土十要』卷八（「安永三年版」一丁表裏）。

- (84) 『靈峰満益大師宗論』（「嘉興藏版」五丁裏）。

- (85) 張聖巖『明末中国仏教の研究―特に智旭を中心として―』一二九～一三二頁（山喜房佛書林、一九七五年）。

- (86) 于海波『清代浄土宗著述研究』一三六～一三七頁（『儒道釋博士論文叢書』四川出版集團巴蜀書社、二〇〇九年）。

- (87) 『浄土十要』にも「重刻宝王三昧念仏直指序」が附載されているが、成時が中間部を省略し、更に末尾を改編している。そこには「今車菴著居士更續刻於長干、特記之以告後賢」とある。なお『正統藏』所収の『浄土十要』活字版では、改変前の『嘉興藏』所収の序と入れ替えている。

- (88) 『靈峰満益大師宗論』五之三（「嘉興藏版」十六丁表裏）。

- (89) 『靈峰満益大師宗論』五之三（「嘉興藏版」二十四丁裏）。

- (90) 『浄土十要』卷一（「安永三年版」五丁表裏）。

- (91) 于海波『前掲書』一六五～一六六頁。「現行本」からの節略、補充としている。

- (92) 「享保六年版」一丁裏。

- (93) 元興寺文化財研究所編『明版一切経』上巻、四四頁（『豊山長谷寺拾遺』第四輯之二、総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、二〇〇八年）。
- (94) 吉田淳雄「前掲論文」三八六頁。
- (95) 原田宗司「俊苒・弁円による宋代浄土教典籍の将来と法然門下におけるその受容」六八三頁～六八五頁（『印度学仏教学研究』第四八巻、第二号（九六）、日本印度学仏学会、二〇〇〇年）。
- (96) 江戸期、禅林寺蔵の『群疑論探要記』（写本）を底本に、京都の書肆が刊行したという事例もある。稲垣真哲編『前掲目録』十二～十三頁。
- (97) ベルンハルド・カールグレンの推定中古音表記による。
- (98) 安部隆一「前掲論文」二二頁。
- (99) 土田健次郎は安史の乱以降、文化が漢民族中心に内向化していく流れを踏まえ、思想史の転換点を、唐中期、北宋の慶暦年間（一〇四一～一〇四八）、宋の南渡の三時期に分類している。『道学の形成』七～十二頁（『東洋学叢書』創文社、二〇〇二年）。
- (100) 『宋高僧伝』巻三（『大正蔵』第五十巻、七二二下）。
- (101) 生没年は森忠重の『和漢詩歌作家辞典』（みづほ出版、一九七二年）によるが、典拠は不明。あるいは聞一多の説を受けたものか。
- (102) 「系曰」以下の文を根拠に、三名に交流があったことを主張する研究書がある。勿論その可能性自体はあるだろうが、賛寧自身はその観点から述べていない。なお「不知鹿死何人之手」の一文は『晋書』に出る「未知鹿死誰手」（『漢語大詞典』参照）を踏まえており、意味は「いまだ誰の手に勝利（天下）が帰するかわからない」である。三

者の比較がその旨趣であるのは明白であろう。

- (103) 諸橋轍次『儒学の目的と宋儒慶曆至慶元百六十年間の活動』五九九頁（大修館書店、一九二九年）。典拠は『宋高僧伝』巻二十九だと考えられる。

- (104) 贊寧による三教調和説は『大宋僧史略』に見られる。また呉越仏教界とも縁が深い。牧田諦亮『中国近世仏教史研究』一一九～一二〇頁（平楽寺書店、一九五七年）。洪淑芬『儒佛交渉與宋代儒学復興——以智圓、契嵩、宗杲為例——』十六～二五頁（大安出版社、二〇〇八年）。

- (105) 黄伯思の出身地である福建は宋学の大成者、朱熹（一一三〇—一二〇〇）を輩出しているように、宋学が盛んな地域であった。黄伯思とほぼ時代を同じくする同郷の儒者には仏教、老莊思想に一定の理解を示した楊時（一一〇五—一一三五）がいる。また楊時の師である程頤（一一〇三—一一〇七）は実際に「一言以蔽」の文言を華嚴教理との調和に用いている。竹内義雄『中国思想史』二四一頁（『岩波全書』七三、岩波書店、一九三六年）。先述の福建における士大夫層が関与した大蔵経刊行と共に考慮すべき背景である。

- (106) 『大谷派学寮講義年鑑』二〇五～二〇六、二二一、二七五頁（『真宗全書』第七五卷「総目録」。初出は『真宗大系正編』第三七卷）。

- (107) 金沢大学附属図書館編『暁烏文庫仏教関係図書目録』一五七頁（金沢大学附属図書館、一九六三年）。